# 日本アッセンブリーズ･オブ･ゴッド教団　信仰綱要

## 「基本的真理に関する宣言」


１　霊感された聖書
２　唯一のまことの神
３　イエス･キリストの神性
４　人間の堕落
５　人間の救い
６　教会の礼典
７　聖霊のバプテスマ
８　聖霊のバプテスマの証拠
９　聖化
１０　教会とその使命
１１　奉仕の務め
１２　神癒
１３　祝福に満ちた望み　◀
１４　キリストの千年期統治　◀
１５　最後の審判　◀
１６　新天新地　◀


---

▽　以下、上記１３～１５を抜粋して記載

### １３．祝福に満ちた望み

キリストにあって眠った者たちの復活と、彼らが主の来臨まで生き残っている者たちとともに天に移されることは、教会の、差し迫った、そして祝福に満ちた望みである（Ｉテサロニケ４：１６、１７、８：２３、テトス２：１３、Ｉコリント１５：５１、５２）。

### １４．キリストの千年期統治

キリストの再臨には、わたしたちの祝福に満ちた望みである聖徒たちの携挙が含まれており、その後キリストは、千年の間地上で治めるために、聖徒たちと共に目に見えるかたちで帰ってこられる（ゼカリヤ１４：５、マタイ２４：２７、３０、黙示録１：７、１９：１１～１４、２０：１～６）。この千年統治は民族としてのイスラエルの救いと（エゼキエル３７：２１、２２，ゼパニヤ３：１９、２０、ローマ１１：２６、２７）、世界平和の確立（イザヤ１１：６～９、詩篇７２：３～８、ミカ４：３、４）をもたらす。

### １５．最後の審判

死んだ悪人がよみがえらされ、そのしわざに応じてさばかれるところの最後のさばきがある。いのちの書に名が記されていない者はみな、悪魔とその使いたち、獣と偽預言者と共に、火と硫黄の燃える池の永遠の刑罰に入れられる。これが第二の死である（マタイ２５：４６、マルコ９：４３～４８、黙示録１９：２０、２０：１１～１５、２１：８）。

### １６．新天新地

「わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」（Ⅱペテロ３：１３、黙示録２１章、２２章）。

# １３．祝福に満ちた望み

キリストにあって眠った者たちの復活と、彼らが主の来臨まで生き残っている者たちとともに天に移されることは、教会の、さし迫った、そして祝福に満ちた望みである　（Ｉテサロニケ４：１６、１７、ローマ８：２３、テトス２：１３、Ｉコリント１５：５１、５２）。

ここから最後までは終末に関する事柄です。終末に起こることを整理すると、1、キリストの空中再臨、2、聖徒のよみがえり、3、聖徒の携挙、4、キリストの地上再臨、5、千年王国、6、最後の審判、7、新世界となります。このうち、5、6、7 は別項目になっていますので、あとで扱うことにいたします。

## 再臨の約束

旧約の預言者たちはキリスト（メシア）が来られるときには、ダビデの王国を再建すると預言していました。ですから、キリストが来られたときに、多くの人はそれを期待しました。しかし、キリストはそれを行ないませんでした。むしろ、それは未来のこととして語られたのです。預言者たちはキリストの来臨が二回にわたることを知らなかったのです。そこでキリストは公生涯の終わりにはしばしば、十字架の死を予告し、同時に再び来られることを予告いたしました。そして、そのときにユダヤ人に対する約束を成就し、悪人を裁いて滅ぼし、一切を解決することを示されました。こうして、第一降臨は十字架によるあがないの実現、第二降臨は終末における完成という図式が明瞭になったのです（ヘブル９：２８）。

十字架のあがないによって罪を赦され、神の子とされた者たちは、直ちに完全なものとされて、神の御国へつれていかれるのではありません。残された地上の生涯をキリストに従って歩んでいくのです。しかもその間、弱い肉体とつき合いながら、聖く正しく生活しなければなりません。そこで、救いの完成はいつなのかということが問われることになります。それに対し、キリストの再臨こそがそのときであることが示されているのです。

## 再臨に含まれる出来事

キリストは弟子たちが見ている前で、昇天されたときのように、再び、目に見える形で、栄光の勝利者として来られるのです。そのとき、既に死んでいる聖徒たちは墓からよみがえります。キリストが「私を信じる者は、死んでも生きるのです。」と言われた通りです。こうしてキリストがまことによみがえりであり、いのちであり、その救いが人間の究極の敵である死とよみに対して勝利するものであることが具体的に明示されるのです（Ｉコリント１５：５４）。パウロがキリストの復活は初穂であったと言ったのはこのことを意味していました　（Ｉコリント１５：２０）。さらにこの時、生きて残っている聖徒たちは、瞬く間にそのからだを変えられて、キリストのそばに引き上げられます。このことを「携挙」と言いますが、キリストの復活のからだと同じような、栄光のからだ、霊のからだに変えられるのです。こうして、すべてのものが待ち望んでいた肉体のあがないも成就するのです（ピリピ３：２０，２１）。そしてその日に、私たちは最終目標であるキリストに似た者となるのです（Ｉヨハネ３：２）。

### 緊急性

こういう日が来るという希望が、キリスト者には与えられています。しかもそれはよい行ないに対する報酬の日です。「見よ、わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る」(黙示録２２：１２)。そこで、キリスト者は迫害されても、苦難に会っても、あるいは不当な扱いを受けても、その日を望みながら、進んでいくことができるのです。ですから、それは「祝福された望み」(テトス２：１３)と呼ばれるのです。

しかもそれは「さし迫った」望みなのです。それはキリストの再臨が近いことを示しています。キリスト者にとっての希望は、いつだかわからないような、実現するのか、しないのかわからないような漠然としたものではなく、まもなく実現する、確実なものなのです。ですから、私たちは「このことばをもって互いに慰め合いなさい」(Ｉテサロニケ４：１８)と勧められているのです。

### 準　備

同時にそれは私たちへの警告にもなっています。いつこのことが起こるのかという弟子たちの質問に対し、主はその前兆を詳しく説明されました(マタイ２４章)。しかし、「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」（マタイ２４：３６)とも言われました。ですから、用心していなければなりません。

花婿を出迎える十人の娘の話は、このことのたとえです。主の再臨が遅いと思って、目を覚まして待っていないと間に合わなくなるのです。「人の子は、思いがけない時に来るのですから」（マタイ２４：４４)。主はその前に起こる前兆を多く示されました(マタイ２４章)。今はそれらの前兆から見ても、もっともその日に近いように思えます。ですからいつ主が来られてもよいように、日々備えながら生活しなければなりません。

## １４．キリストの千年期統治

**キリストの再臨には、わたしたちの祝福に満ちた望みである聖徒たちの携挙が含まれており、その後キリストは、千年の間地上で治めるために、聖徒たちと共に目に見えるかたちで帰ってこられる　(ゼカリヤ１４：５、マタイ２４：２７、３０、黙示録１：７、１９：１１～１４、２０：１～６)。この千年統治は民族としてのイスラエルの救いと　(エゼキエル３７：２１、２２、ゼパニヤ３：１９、２０、ローマ１１：２６、２７)、世界平和の確立(イザヤ１１：６～９、詩篇７２：３～８、ミカ４：３、４)をもたらす。**

前項で、キリストの再臨は私たちの祝福に満ちた希望であることを見ました。しかし、キリストの再臨は一挙に起こることではなく、種々のことがそこに含まれています。それを順序を追って並べてみましょう。

### 再臨の順序

(１)キリストの空中再臨

再臨はまず、キリストの空中再臨で始まります。テサロニケ人への第一の手紙４：１６、１７にあるよう

にキリストは突然、御使いのかしらの声と、ラッパの響きのうちに下ってこられます。しかし、地上にまで来られるのでなく、空中に留まっておられます。

（２）死者の復活

キリストが来られると、主にあって召された死者がまず、墓の中からよみがえります。これはキリストが言われた、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」（ヨハネ１１：２５）というみことばの成就です。

（３）携挙

死者の復活に続いて、キリストの再臨を待ち続けていたキリスト者たちが空中に引き上げられる「携挙」が起こります。そのとき、彼らのからだは瞬間的に、キリストが復活されたときと同じからだに変えられます。復活したキリストは生前のキリストと同じように見えました。しかし、かぎのかかった密室に集まっていた弟子たちの中に音もなく入ってきたり、また話したあとすっと出ていったりしています。それは普通のからだではなく、死を乗り越えたからだで、霊のからだ、栄化されたからだと言われるものでした。キリスト者もそれと同じからだに変えられて空中に引き上げられるのです。そして、そこで主にお会いし、復活した聖徒たちとも再会することになります。その後「小羊の婚宴」（黙示録１９：９）と言われる幸いなときを持つことになります。

（４）大患難時代

キリスト者が空中に携え上げられた後、地上には「反キリスト」と言われる人物が出現し、政治、経済、宗教の分野を独占する権力の座につきます。彼は世界の勢力を結集して、神に逆らうように仕向けます。さらにユダヤ人に対し迫害を加えます。その迫害は今までにあったどの迫害よりもひどいものとなるでしょう。ですから、この時代を大患難時代と呼ぶのです。

（５）地上再臨（顕現）

聖徒たちが空中で小羊の婚宴を祝っている間、地上では恐ろしい患難時代が続きます。その期間はあまり長くありません。7年であるか、その半分の3年半であるか、学者の間でも意見の分かれるところです。しかし、それを終結させるのは、主の地上再臨です。キリストは昇天されたのと同じ場所であるオリーブ山に聖徒たちと共に降りてこられます（使徒１：１１、１２、ゼカリヤ１４：５）。そして、キリストはエルサレムに向かって進み、王の王、主の主として王座を設立なさいます。その結果、それまで世界を支配していた反キリストの勢力は鎮圧されてしまいます。

（６）千年王国（千年期）

こうしてキリストは全世界を義と平和をもって支配することになり、聖徒たちもキリストと共に支配する

ことになります。この期間が千年と記されていますので　（黙示録２０：６）、これを千年統治、千年王国と呼びます。これは旧約時代に、神がユダヤ人に約束されていたことの成就であり（エゼキエル３７：２１、２２）、神の国が地上に実現した姿なのです。ユダヤ人はイエス・キリストが自分たちの求めていたメシアであったことを知り、彼を十字架につけた罪を悔い改め、パレスチナに集まってきます。エルサレムの神殿は再建され、キリストがほんとうのメシアとなられるのです。

サタンは縛られ　（黙示録２０：１２）、全人類が主を知るようになります（ゼカリヤ１４：９、イザヤ２：２、３）。全世界に主の栄光が満ち、平和が満ちあふれます。人々のいのちは長く延びるでしょう（イザヤ６５：２０～２３）。そして変化は動物の世界にまで拡大されることが預言されています（イザヤ１１：６～９）。そんなすばらしいときを、自然界も待望し続けているのです（ローマ８：１８～２３）。

## 千年王国

千年王国については今までにも種々の考え方が出されてきました。その中でも代表的なものは後千年王国説、無千年王国説、前千年王国説の３つです。この名称は誤解を生みやすいので、千年期後再臨説、無千年期説、千年期前再臨説と呼んだほうがよいでしょう。それは再臨が千年期のあとなのか、前なのかということに関係しているのです。

### （１）千年期後再臨説（後千年王国説）

この説はもともと第四世紀のアウガスチヌスがローマ教会の発展により、地上に神の国が実現すると主張したことから始まりました。その後もキリスト教の盛んな時代には、全世界を伝道、教化することによって、神の国を地上に建設できると考え、主張されてきました。事実、歴史に残る有名な宣教師もこのような考えから外国伝道に励んだこともありました。しかし、いまだに地上には目に見える形でキリストはおられませんし、ダビデ王国の再建もなされていません。ですから、世界は次第によくなっていき、知らず知らずに千年王国に入っていくなどということは考えられなくなっているのです。近代科学の発達に伴い、世界はむしろ無信仰化され、さらに異教化され、人間の罪性がもろに社会に反映されるようになりました。私たちの時代は神の国とはほど遠い状態になっていると言わなければなりません。

また、全世界がキリスト教化された後にキリストが再臨されるなら、いつ主が来られるかわからないという聖書の教えと矛盾しますし、緊張感も生まれてきません。でも、緊急性は再臨に関する重要なポイントなのです。

### （２）無千年期説

これは千年期後再臨説が間違いであると考えた人たちによって主張されてきた比較的新しい説です。この説では千年王国を霊的に捉え、キリストの第一降臨によって実現した神の国と考えるようです。すなわち、キリスト者の心の中に実現した神の国、あるいは教会という形で現された神の支配と言うのです。しかし、教会という形で現わされている神の国は、残念ながら千年王国の実体からかけ離れております。特にユダヤ人に対するダビデ王国の再興という預言の成就が含まれていないことに注目しなければなりません。

この説の保持者の中には歴史の完成時点でキリストが来臨されることを信じている人もいますが、五旬

節の日における聖霊の降臨のときにキリストが再臨されたとする人もいるようです。

（３）千年期前再臨説（前千年王国説）

これは以上の二説に対して、よりいっそう聖書を字義的に解釈しょうとする説です。それは今日の科学的教育を受けた人たちにとっては理解しにくいことを多く含んでいます。しかし、世界は徐々によくなって神の国になるのではなく、キリストの再臨によってのみ地上に神の国が実現すると信じています。しかも、再臨は突如として起こることで、だれもそのときを知らないのです。これはキリストがしばしば強調されたことです。

予兆はマタイ２４章にあるように、現在多く見ることができるでしょう。今後、反キリストの出現も考えなければなりません。しかし、あるとき、突然、キリストは姿を現わされるのです。そして携挙と顕現の後、王座がエルサレムに置かれ、神殿が再建され、ユダヤ人が回復されるのです。これはアッセンブリーの立場です。

## １５．最後の審判

**死んだ悪人がよみがえらされ、そのしわざに応じてさばかれるところの最後のさばきがある。いのちの書に名が記されていない者はみな、悪魔とその使いたち、獣とにせ預言者と共に、火と硫黄の燃える地の永遠の刑罰に入れられる。これが第二の死である　（マタイ２５：４６、マルコ９：４３～４８、黙示録１９：２０、２０：１１～１２５、２１：８）。**

ここには悔い改めない罪人に対する罰が明示されています。

千年王国は神の最終的なご計画ではありません。千年というのは長い期間ですが、永遠ではありません。祝福に満ちたこの時代もやがて終了します。そのとき、サタンがもう一度解放されます。サタンは世界中の人を惑わし、神とキリストに逆らうようにします。しかし、神はこれに勝利し、サタンを永遠に閉じこめてしまいます（黙示録２０：７～１０）。

その後すべての者はよみがえらされ、神の前に出て、裁かれるのです。これは大きな白い御座によって行なわれるので、「大白座の審判」と言われますが、一般的には「最後の審判」とも言われています。

いのちの書に名前を記されていない人はみな、その行ないにしたがって裁かれます。ここに神の厳しさを見なければなりません。その刑罰は永遠に続くのです。

### よみと地獄

旧約聖書は死者の魂の行くところを「よみ」（シュオール）と言いました。新約聖書ではそれを「ハデス」と呼んでいます（マタイ１１：２３、１６：１８等）。そこは二つの区画に分かれており（ルカ１６：１９～）、正しい人たちは「アブラハムのふところ」または「パラダイス」という部分に行くのです。

一方、通常地獄と言われているところは「ゲヘナ」と言われています。ゲヘナ（マタイ５：２２、２９等）は火の池（黙示録１９：２０、２０：１０、１４、１５）と同一視されている究極の滅びの場所です。これは「第二の死」とも言われています。そこには火と硫黄が燃えており、死もハデスも投げ込まれてしまいます

（黙示録２０：１４）。その火は永遠に燃え続けます（マタイ２５：４１）。

これはサタンとその使いたちのために備えられたものですが、神に逆らう人、悪魔に仕える人たちは最終的に共に投げ込まれることになります。神はすべての罪人を最初からここに入れることを予定しているのではありません。むしろ「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか」（エゼキエル３３：１１）と訴えているのです。それにもかかわらず、救いを願わない人々はそこに落ちていくのです（ヨハネ３：３６）。

私たちはこの恐ろしい永遠の滅びから人々を救うために、福音宣教に励まなければなりません。滅びてからでは取り返しがつかないのです。

## １６．新天新地

「わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」（IIペテロ３：１３、黙示録２１章、２２章）

最後に神は一切を新しくなさいます。

最後の審判は神による大掃除です。神に逆らい、多くの人を惑わした悪魔は永遠に火の他に閉じ込められてしまいます。そこで、神は罪と反逆と血に汚された地球を焼き尽くし、それに代わるまったく新しい世界を始められるのです。

神は天地は滅びると言いました（マタイ５：１８）。ペテロは天の万象も地と地のいろいろなわざは焼き尽くされると言いました（IIペテロ３：１０）。これはノアの時代の洪水による滅亡と対比されています。それは一切合財壊滅させるということではなく、罪を除去した新しい世界の再生を意図したものと思われます（イザヤ６５：１７）。

その新しい天と地はどのようなものでしょうか。

黙示録２１章、２２章にその概要が示されていますが、多分人間のことばでは充分に表現できないほどすばらしいところでしょう。すべてが新しいのです（黙示録２１：５）。その広大さ、その美しさ、その絶大な価値は今までの私たちの常識をはるかに越えたものです。すべてが過去のものを越えており、現在私たちの体験しているいやなものすべてが消えてしまっています。そして何よりもすばらしいのは、神が人と共に住み、共におられ、人は神の民、神の子として共に永遠に生活できることです。

アブラハム初め昔の聖徒たちはこれを霊の目で眺めながら、信仰の道を歩んでいったのです（ヘブル１１：８～１６）。これこそはキリストを信じ、その救いにあずかった私たちにも与えられている約束です。

アルファであり、初めである神は、オメガであり、終わりである神です。その神がそこにおられるのです。